

東日本大震災からの復興経過報告

東北はひとつ

～感謝の想いを込めて・未来へ～



(東北の若き雄が集って決意を)

東北地区知的障害者福祉協会

目 次

挨拶

… P 1

公益財団法人日本知的障害者福祉協会	会長	橘 文也
東北地区知的障害者福祉協会	会長	井上 博

支援側の思い 支援団体等 … P 2

真言宗豊山派 薬王院（東京都）	住職	鶴 晃秀
独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園	理事長	遠藤 浩
特定非営利活動法人東京都発達障害者支援協会	顧問	柴田 洋弥

報告 岩手県 … P 4

岩手県知的障害者福祉協会	会長	鷹觜 武寿
社会福祉法人親和会 望みの園はまなす	理事長	山崎 幸男
社会福祉法人わらび会 わらび学園	施設長	三浦 浩一

報告 宮城県 … P 7

宮城県知的障害者福祉協会	会長	二階堂 明彦
社会福祉法人洗心会	事務局	熊谷 真佐亜
社会福祉法人つどいの家 仙台つどいの家	施設長	山口 収
社会福祉法人円 まどか	施設長	遠藤 邦弘
社会福祉法人白石陽光園 就労B型八枚田	利用者、職員一同	

報告 福島県 … P 10

福島県知的障害者福祉協会	会長	古川 敬
福島県福祉事業協会		広報事業部
社会福祉法人友愛会	法人事務局長 施設長	
光洋愛成園		寺島 利文

写真で伝えるメッセージ … P 13

いわてから ありがとう
みやぎから ありがとう
ふくしまから ありがとう

隣県としての取組 … P 16

青森県知的障害者福祉協会	会長	小畠 敦
秋田県知的障害者福祉協会	会長	桜田 星宏

証言集 … P 17

～あの日、あの時、私たちは そしてこれから～

平成23年3月11日、午後2時46分に発生した東日本大震災、あれから7年がたちます。この報告書は発災当時から現在まで、全国からのご支援に対して感謝を込め、復興状況の一端をご報告するものです。ご支援をいただきました個人・団体、より多くの方々の目に触れることがあります。また、全国に転居された東北ご出身の方々の目に触れることを期待するものです。寄稿文ならびにメッセージ写真は、平成29年9月時点でお寄せいただいております。

公益財団法人日本知的障害者福祉協会 会長 橋 文也



芽吹きの春待つ大地が激しく揺れ、青く光る大海原が真っ黒く濁った荒波となって人々に襲いかかった、あの大災害から早7年。新聞等で、その後の状況が報道されておりますが、未だに行方不明の方が多くいらっしゃることに心が痛みます。改めて亡くなられた方々の御靈に心より哀悼の誠を捧げます。また、被害に遭われ、復旧、復興にご苦労されている皆様におかれましては、ご自愛くださいますようお祈りお願い申し上げます。

♪花は 花は 花は咲く 私は何を残しただろう♪

被災された方々の癒しにも励みにもなる歌が流れ、私達には、何をどう取り組まなければならないのか、問いかける歌でもあります。

本会といたしまして、震災後、当時の中原会長のもと、障がい福祉関係施設・事業所の被害状況の把握に努め、被害の甚大さが明らかとなっていく状況から、先ず支援物資の手配が必要と考え、その取り組みと災害義援金のお願いを全国の会員にお願いいたしました。その後、現地視察に赴きましたが、目の辺りの光景は想像を絶するものでした。一方、東北地区知的障害者福祉協会をはじめ、全国の会員も現地施設・事業所への職員派遣を含めた支援活動を立ち上げてくださいました。知的障がい児（者）福祉の向上を目指して、志を同じくする者同士の日頃からの交流が活かされ、絆を持って行動していただいた皆様に感謝申し上げます。

大震災後、全国各地では毎年自然災害が発生しております。本会といたしましても、施設・事業所の防・減災の在り方について、リスクマネジメント研修会の開催等を通して、また、危機管理委員会等での検討協議を重ねることが各地での今後の取り組みに資するものと捉えております。

この度の本誌の発行は、決して忘れてはならない大震災の悲惨さを教訓として、後世に残す有意義な資料本となることを願い、出版にご尽力された方々に敬意を表しますとともに、御礼を申し上げます。



東北地区知的障害者福祉協会 会長 井上 博

東日本大震災から7年が経過し、全国の日本知的障害者福祉協会加盟事業所をはじめ、多くの皆様から被災地に対して物心両面から支えていただき心より感謝申し上げます。

この報告書は全国からいただいた多くの支援への感謝と岩手・宮城・福島被災三県の復興状況をお伝えしたいとの思いから発刊いたしました。

改めて千年に一度という未憎悪の大災害によって失われた多くの命とご家族はじめ関係する皆様に心より哀悼の意を表します。

さて、東北地区知的障害者福祉協会は震災発生直後から「東北はひとつ」という分枝勝則前会長からの指示のもと被災三県と隣接する三県が一体となって支援に取り組んだ背景があります。7年の時が経過し風化が自分自身の中でも懸念される中で、このたび改めて被災地にお伺いいたしました。

宮城県石巻市牡鹿半島の先端に位置する「くじらのしっぽ」は震災発生後、山形県協会が支援に入りその後も交流が続きました。石巻から車で40分程の距離にある事業所で大震災を乗り越え元気に就労事業に取り組まれておられました。途中の海岸は震災後の片づけは進んでいましたが現在も工事車両が行き来し巨大な防波堤が築かれ以前の美しい白浜の光景はすっかり失われています。巨大なコンクリートの前で国の復興政策はこれで良いのか疑問でした。

福島県の光洋愛生園は原発事故発生から国立コロニーに避難を余儀なくされ、以前の場所には戻れずに新たに広野町に新しい拠点を移しておられました。寺島施設長をはじめ多くのスタッフ利用者がこの間に経験したご苦労が忍ばれました。現在広野町には住民のほかに3000名を超える皆さんが原発事故後の対応にあたっておられるとのこと。帰還が難しい住民も多く、福島は今も震災の真っただ中にあることを実感します。

千年に一度という大震災が、なぜに東北に、なぜ今の時代に発生したのか？ その意味を問うにはあまりにも多くの犠牲や悲しみがあり、適切な言葉が見つかりません。東北から多くの悲しみを乗り越えた人間の力強さとやさしさ、そして障害のある人が大事にされるやさしい東北を全国に向けて発信し続けたいと思います。

茶会を通した支援活動

真言宗豊山派 薬王院
住職 鶴 晃秀



平成 23 年 3 月 11 日に発生した未曾有の大地震、大津波は多くの人命を奪い、無残にも住む町を破壊し尽くしました。毎日毎日テレビにて写されるその悲惨な映像は災害の規模だけでなく、計ることが出来ない悲しみや苦しみを表しています。

仏教界では阪神・淡路大震災の経験もあり、いち早く現地での支援に立ち上がり、豊山派でも浄財を集めの活動に乗り出しました。

被災地に赴き支援をしたいと思っても行けない私共にも何か出来ることがないか、友と語らい、一服の茶を通じてささやかながら義援金の協力を仰ぎ、復興を支援しようという結論に至りました。

私には分を過ぎた音頭とりとは存じましたが、茶友の方々のお手助けを頂き、5回の義援茶会を催すことが出来、宮城、岩手、福島の知的障害者福祉施設へ、計 20,800,000 円の義援金を贈呈する事が出来ました。

この義援茶会を催すにあたり、この趣旨に賛同頂いた篤志家の方が、名物の大井戸茶碗（「立華」大聖寺松平家、三井家伝来）、掛物、過去現在因果経・天平時代、茶入れ・唐物丸壺、秀吉公北野大茶の湯使用等、数々の名品をお貸し下さり、その道具をもってお茶を差し上げる運びとなりました。

又、この5回の茶会には遠州茶道宗家 13 世家元小堀宗実様、武者小路千家千宗屋若宗匠様、表千家家元理事菅田健三宗匠、菅田浩行宗匠、銀座池内美術主人池内宗雪様、銀座万葉洞主人関谷徳衛様、表千家菅田健三宗匠門下社中の多くの方々にお手伝い頂きましたことによって無事にこの事業が成し遂げられましたこと深謝申し上げます。

被災地の多くの処は、まだ厳しい環境の中で困難な生活を送っておられる推察します。

今後も被災地の方々のことを心に留めて過ごして参りたいと思っております。

友愛会との 5 年間の縁を大切に

独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園
理事長 遠藤 浩



福島第一原発の事故により避難を余儀なくされた社会福祉法人友愛会の職員と利用者の皆様は、平成 23 年 4 月 15 日午後、のぞみの園に到着しました。生活環境が整備され、かつ、利用者と職員が分散しないような一括避難の受け入れが可能な施設として、のぞみの園が皆様を受け入れることとなつたのです。

友愛会は、福島県双葉郡で 20 年にわたり知的障害のある人たちの福祉事業を実施していましたので、高崎の地でも従前と同様に事業を行えるように特に配慮して、受け入れの準備に万全を期しました。地域移行の推進により閉鎖した生活寮 3 寮と日中活動の場となる施設を提供するとともに、群馬県と高崎市などの協力も得て、職員の住まいを確保しました。

以後 5 年間にわたり、定期的な連絡会を開催して友愛会の皆様の希望をお聞きし、できる





限り協力する一方、決してお節介はしないという方針の下、隣組の施設として節度あるお付き合いをさせていただきました。

友愛会の皆様の一致した願いは、福島県双葉郡への帰還でした。復興事業が最盛期にあり、建設用地の逼迫、建設資材の高騰、人手不足などの悪条件が重なりましたが、友愛会の幹部の皆様が骨身を惜しまず奔走した結果、洋野町の太平洋を望む高台に新施設を整備し、念願の福島県双葉郡への帰還を実現しました。

ただ、施設周辺は事故処理や除染に携わる人と車両が行き交い、地域社会の再生は容易ではありません。友愛会が広野町の地域社会再生のために大きな役割を担っていくことが期待されているともいえます。

平成28年4月27日、友愛会の皆様がバス2台に分乗してのぞみの園を出発し、広野町に向かいました。見送る方も見送られる方も弾けるような笑いと別れを惜しむ涙が交錯しました。

隣組の施設としてお付き合いをさせていただいた友愛会の皆様が、300kmも離れた広野町に戻られてしまつたことに一抹の寂しさを感じますが、5年間の縁を大切にして、友愛会のご発展の様子を見守り、要請があればできる限りの協力をしてまいりたいと考えています。

被災地への人的支援に関わって

特定非営利活動法人東京都発達障害者支援協会

顧問 柴田 洋弥



大規模災害では、被災地域の中の人は災害の全容が分からず、逆に遠くの人ほど情報を得やすいため、情報を集めて一刻も早く現地に行くことが重要です。震災直後から、宮城県沿岸部の知り合いの施設に電話しましたが、3月15日によく仙台市の「つどいの家」につながりました。自宅が被災した利用者と家族や職員が通所施設に泊まっていること、仙台市の「まどか荒浜」や名取市の「るばーと」が津波で全壊したが利用者は避難したこと、石巻市の「ひたかみ園」周辺の被害も大きいこと等を教えてもらいました。

3月23日に東京都発達障害支援協会（日本知的障害者福祉協会傘下）と東京都社会福祉協議会知的発達障害部会が合同対策本部を設置して、宮城県に職員を数名ずつ、毎週交代で派遣することを決定しました。

3月27日、私は宮城県に入り、宮城県知的障害者福祉協会役員と協議し、お互いに持っている情報の交換をしましたが、気仙沼方面の状況は全く分かりませんでした。3月29日、東京の派遣第1陣が、船形コロニー職員の道案内で、気仙沼市・南三陸町を視察し被害が大きいことが分かり、東京の職員派遣を気仙沼方面に集中することとなり、その後の長期支援が始まりました。

宮城県協会の災害対策本部で、私は各県協会に職員派遣を依頼するコーディネーターを1年間担当しました。2012年3月まで、被災11施設やその地域生活支援部門に、各県協会の福祉専門職が一週間交替で切れ目なく派遣され、派遣数は延べ732人、4,636日に達しました。

また厚生労働省や宮城県と協議して、派遣職員の交通費・宿泊費に災害救助費を適用するシステムを作りました。このシステムは、2016年の熊本地震にも活用されました。日本は今後も大災害が予測されています。この職員派遣を通して、「助け合う福祉」の心が各地の福祉現場に広がったことは、将来に向けての大きな希望だと思います。

※災害発生時 特定非営利活動法人東京都発達障害者支援協会 理事長

手を携えながら「岩手は元気です」といつか必ず

岩手県知的障害者福祉協会 会長 鷹賀 武寿

被災状況を伝える書籍に記された「鳥は飛ばねばならぬ 人は生きねばならぬ」に目が留まった。熊本県の詩人・坂村真民（しんみん）の訳詩と知った。復興の先行きが見えない当時、酷に感じた「…ねばならぬ」の表現であった。

今も「電気、大事だよね」と地震と停電を恐れるAさん。津波に遭うも後に救出されたBさん。施設休所が続いたことで円形脱毛症を呈したCさんの母親は「もう、限界です」と職員に訴えた。状況を理解させようとDさんのお母さんは、「ほら、○○園は壊れてしまったのよ」と明かりの灯らない施設を見せた。これは一事業所での体験である。岩手県内の施設・事業所では言い尽くせないほどの畏れや涙、憎しみと悲しみ、離別と再会があった。

全国から届く物資の箱には様々なメッセージ文字が記されていた。その一つひとつに励まされた人の数は計り知れない。全国からの直接的・間接的なご支援は多くの方々のいのちをつないだ。生き抜く力を蘇生させていただいたとの思いを全県民が感じている。

紙幅の都合上、復興状況は沿岸被災地の会員施設からの報告に委ね、発災以降の雑感を述べさせていただく。

沿岸被災地を訪れると、地元の語り部からその土地特有の被害状況と復興状況を知ることになる。現地を訪れて知ることがそこにはある。沿岸施設の方から伺った「家族を失った職員のケアを実施してきたが、効果のほどは分からぬ。利用者と接しているうちは紛れているのかもしれない」との内容は印象深い。

岩手県の被災地では以前から風化懸念が持たれている。私たちが発信し続けること、全国に移り住んでいる東北出身の方々が語り継ぐことが大事と考える。平成24年に神戸市にある防災センターを訪れた際、「東北であれだけ大きな地震が起きた。これで阪神大震災は忘れ去られる」との危機感を持っていることを知った。しかし、過去の災害からまちづくりを学ぶ動きは現にある。復興住宅やまちの再生については阪神淡路大震災から学び、津波被害からの再生については北海道南西沖地震（平成5年）後の再生計画を参考にしている。

「人は生きねばならぬ」に、後世に遺す使命を含んだ生き方を教示していると捉えている。

ご支援をいただいた全国の皆さまお一人おひとりに感謝の思いをお伝えすることは叶いませんが、常に感謝の気持ちを持ち続けていることは確かであり、「岩手は元気です。東北は元気です」との気概を持って手を携えながら邁進してまいります。

前に、明日に向かって

社会福祉法人親和会 望みの園はまなす 理事長 山崎 幸男

1000年に一度と言われている、未曾有の大震災から早6年が経過しました。

当時、当施設は岩手県山田町の沿岸部にあり、海より20mほど離れた場所で利用者様、職員共に穏やかな海を眺めながら生活を共にしていました。

しかし、そんな穏やかな海が一変しました。2011年3月11日午後2時46分、突然の経験した事のない強い揺れに、立っているのが精いっぱいで、利用者様、職員共に恐怖と不安でパニックに陥りました。余震が続く中、どうにか利用者様を外へ誘導し点呼を取りましたが利用者様の人数が少ない事に気付きました。当時その時



正面から受けた津波の脅威



周辺の被災状況



不安な日々を…

とを条件に山田町で生活することが出来る事になりました。

食事は、支援物資のパン、自衛隊の炊き出し弁当。トイレは段ボールで囲まれたポータブルトイレ。歯磨き洗面はバケツで対応。この状況を乗り切るには、建物内の消毒の徹底、排泄物の処理、食事の準備には細心の注意が必要で、かなりの労力を覚悟していましたが、北海道、青森県、岩手県、災害看護支援機構からの派遣職員の皆様、ボランティアの皆様のご尽力のお蔭様で無事乗り切ることができました。感謝しきれないほど、心身共に助けていただき、この場をお借りし厚く御礼申し上げます。

震災後、災害国庫補助金を活用した施設復旧を目指し、国からも建物の早期復旧を急がされました。当時は土地、設計士、建設業者が見つからない、建築資材の高騰に人手不足が重なり入札額が高騰し、着工の遅れ、着工するが完成の遅れなど、幾多の困難を乗り越え新施設が完成しました。

現在は、震災で被災した当法人の4施設は全国のモデルとなるべく全て高台へ移転し通常のサービスを提供できるまでになりました。

ここに至るまでは、全国の皆様、世界各国の皆様の温かいご支援と励ましのお言葉をいただきました。また、施設完成後も数多くの個人、団体様に遠方から毎年当施設へ足を運んで

間帯は入浴の時間でした。余震で、建物の天井が崩れたり、物が落ちてくる中救助へ向いました。利用者様の中には、難聴で何が起きているか分からぬまま洗体を行っている方や、避難を促すが拘りが強く洗髪がまだ終わっていないからと拒否する方、トイレに行きたいと動かなくなる方がおられ避難に時間を要しました。

地震から5分後、目の前に広がる海原の水が沖へと引いていき海底が見えてきました。過去の津波を経験している先人からの教えで、高台避難を決定し、午後3時に高台へ避難を開始しました。ラジオからの情報で十数cm、3mの津波が来るとの情報を得（実際は18m）、避難を開始しましたが、通常の避難路が建物が崩れて通行できず、瓦礫の脇の通路を確保しバス避難と徒步避難とに分かれて避難し、利用者様、職員共に全員無事でした。

その後、3ヶ所の避難所と仮設施設で3年間生活することになりました。その間、岩手県より衛生環境が悪く感染症の可能性が高いので、山田町を離れ、250Km以上離れた、内陸部にある空き施設へ引っ越すよう指導を受けました。

保護者は、利用者様と面会できなくなる、利用者様は環境の変化が苦手でかなりのストレスを抱える事になる、職員は、半数以上の方が退職しなければなく、今の環境より混乱を招くことを岩手県へ申し出、衛生管理を徹底することを条件に山田町で生活することが出来る事になりました。



仮設の施設



新 はまなす

いただき、6年経った今でも私達の事を気にかけていただいております。このご恩は、一生忘れることなく、必ずや何かの形で恩返しえきればと思っております。

その為にも、私達にできることは、震災で被災を経験した施設として、災害に強い施設作りをして全国のモデルになること、沢山のご支援、励ましのお言葉をいただいた方々の事を忘れず、前に明日に向かって生きていくことだと思っております。

皆さまのご支援で、私たちは前を向く

社会福祉法人わらび会 わらび学園 施設長 三浦 浩一

平成23年3月11日、忘れもしない東日本大震災が起こりました。

一瞬にして、大津波が町をのみこんでしまい、何が起こったのか信じられない光景でした。その現状を受け止められずに苦渋の日々が続きました。

当園でも、釜石市鵜住居町にあった分園が流出するなどの甚大な被害を受け、わらび学園を再建できるのか不安ばかりが募っていました。

そのような状況の中でも、「学園を再開してほしい」という保護者の方からの声に背中を押され、職員一丸となって再開に向けた準備を進めていきました。その間、様々な方々からご支援をいただき、勇気づけられ、少しずつ笑顔を取り戻すことができました。

そして、その年の5月に、大槌町小槌にある本園での新たなスタートを切りました。久しぶりに通ってきた利用者さんに会えた喜びは今でも忘れられません。も



う一度みんなで過ごせる喜びで胸がいっぱいになったのを覚えています。

再開してすぐにたくさんの支援物資、そして寄附が届きました。また、多くのボランティアの方が学園を訪れ、震災後の心のケアにも気を配ってくださいました。まだまだ運営が不安定な中、心強い支えとなってくれた皆様には感謝してもしきれません。このような心温まる支援があったからこそ私たちは前を向くことができたのだと強く思います。

平成24年3月1日には、多機能型の障害福祉サービス事業所に移行し、現在は生活介護19名、就労継続支援B型14名の利用者が通所しています。新しい建物が整備され学園事業の柱となるパン製造に取り組み、皆さんから愛されるおいしいパンを作り販売して働くことが利用者さんの生きがいとなっています。

学園の運営も安定し、新しい利用者さんも増え活気に満ちています。これまでたくさんの方々からいただいた温かい言葉や繋がりを大切にしこれからも前進していきます。

最後に、ご尽力してくれた皆さんに感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

「東日本大震災 7年目を迎えて」

宮城県知的障害者福祉協会 会長 二階堂 明彦

初めに、東日本大震災の際は、全国の知的障害者福祉協会の皆様をはじめ、各種団体の皆様から心温まる励ましの言葉や多大なる支援を頂いたことを、この紙面をお借りし、あらためてお礼申し上げます。

平成23年3月11日午後2時46分に発生した東日本大震災から7年目を迎えるなかで、宮城の被災地ではいまだ復興の槌音がやむことなく聞こえています。震災当時は、重度の障害がある人の中には、被災によるストレスからか何も喋らなかったり、不安で歩き回ったり、避難所の中で夜ごと大きな声をあげるために出でいかざるをえなかったり、また、大勢の人がいる避難所では暮らせず、ほかに行く場所もなく、車の中で生活をした人もいたりして、障害者を抱えた家族は大変な苦労をしたと聞いております。

そのような中で障害者福祉施設が避難場所として、大きな役割を担いました。避難所での生活が困難な障害者や家族、高齢者、地域住民などを受入れ、専門職員によるケア、備蓄食料の提供、施設同士のネットワークによる支援提供などが行われ、これは日頃より行政や地域住民、ボランティアとの相互協力・連携などが図られていたからこそその結果といえます。

このように福祉施設が、避難場所として有効に機能した例からも、災害時の防災拠点としてその役割を果たすことが検討されたならば地域における災害弱者といわれる人達への緊急対応がスムーズに行えるものと考えます。

6年が経過した現在、福祉サービス事業所では、皆様のご支援を頂き事業を再開し、新しい施設に利用者が元気に通い、新しいグループホームでは笑顔で生活を始めています。利用者も職員もあの時に育まれた「きずな」をより一層強くして頑張っています。

県協会としては、あの未曾有の災害となった震災の教訓を今後の災害対策に活かしていくなければならないと考え、有事の際ににおける対応・対策の在り方、そのための費用の在り方、そして災害弱者と言われる人達への支援の在り方など、検討課題として取り組みを進めていく所存です。

「復興状況報告」

社会福祉法人洗心会 事務局 熊谷 真佐亜



被災した のぞみ福祉作業場

あの震災から「6年半もたったのか」「6年半もたつのに…」と複雑な思いと薄れゆく記憶と日々変わりゆく故郷の風景に戸惑いを抱きながら日々業務にあたっています。

この度、当法人の復興状況を報告するにあたり、発災から現在に至るまで多くの方々からご支援を頂戴したことについて感謝いたしますとともに厚く御礼申しあげます。

さて、当法人は気仙沼市と南三陸町を圏域とし、高松園・第二高松園（入所支援）、夢の森・のぞみ福祉作業所（生活介護）、ワークショップひまわり・ワークショップふれあい（就労継続支援B型）相談支援事業所2カ所、グループホーム5カ所と本部事務局を運営しております。被災状況はワークショップふれあいとグループホーム1カ所は焼失、のぞみ福祉作業所、グループホーム一カ所・相談支援事業所2カ所、本部事務局が津波により流失・全壊となりました。6年半の間に本部事務局とワークショップふれあいは難民を救う会様を通じてアメリカーズ様の支援をい

ただき新しい場所に設置することができました。グループホームは2カ所とも別の場所で再開し、相談支援事業所は市と町の建物がそれぞれ完成し事業を継続しているところです。ただ、南三陸町にあるのぞみ福祉作業所については震災後3度の引っ越しを繰り返し、現在の場所（仮設）にて再開しております。本設については平成31年4月開所をめどに国庫補助の協議をしているところであります。県内では最後になると思われます。当法人の完全復興まではまだ道半ばで、資金繰り等にも苦慮していますが、この地域の障害福祉の拠点として頑張っていく所存でありますので皆様のご支援をよろしくお願ひ致します。

最後になりますが、ご支援いただいた皆様方のますますのご活躍を祈念し、復興状況報告とさせていただきます。

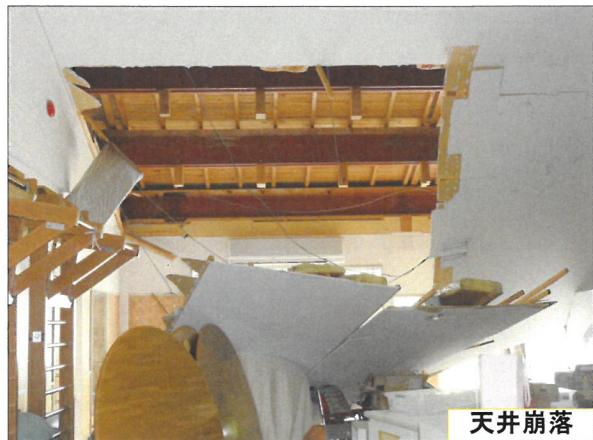
「つながる力とゆいまーる」

社会福祉法人つどいの家 仙台つどいの家 施設長 山口 収

6年半が経過した今、未だ心的外傷を抱える方も見られるものの、ほぼ日常を取り戻し、日々の活動に利用者・職員の笑顔が見られることに感謝します。

先の震災で仙台つどいの家は甚大な被害を受けました。内陸部に位置し津波の被害こそありませんでしたが、盛土地形のため相次ぐ大きな揺れにより建物の天井が崩落してしまいました。深夜でしたので人的な被害はありませんでしたが、その後の調査では地盤が大きく谷方向に流れていることが分かり、現地再建を諦めざるを得ませんでした。

その後、現在地に新築再建を果たすまでに2年4ヶ月を費やすことになるのですが、その間何度も挫けそうになる利用者・職員を支えたのは、全国各地の仲間たちからのエールでした。



天井崩落

震災直後に届いた応援旗には『薬は足りてるか?』の文字。阪神の経験から発せられた西宮の利用者の言葉でした。1週交代で約2ヶ月間、継続的に建物の片づけや活動支援に入ってくれた国分寺のチームもありました。この他岐阜や横浜などの日頃から仲良くしている法人の職員も数多く活動支援に入ってくれましたが、いずれも利用者支援の専門性があり、たいへん助かりました。

石川県から駆けつけてくれた職員は、沖縄の出身でした。2週間の支援を終えて別れ際、「僕の故郷には『ゆいまーる』という言葉があります。沖縄の人の心の中に昔からずーっと生き続けている言葉です」と言ってお別れの握手を求めてきました。意味を問うと「特にリーダーのいないインフォーマルなグループで、農家ではさとうきびの収穫をメンバーが交互に協力してやっています。言ってみれば『助け合い』の精神かな」との由。差し出された彼の手を握り言いました。「万が一、不幸にして石川県で同じことが起こったら、今度は私たちが駆けつけます!」。震災は不幸だけれど、かけがえのない出会いも運んでくれました。日本全国に友がいる。次は自分の番だ。



仮設施設



仙台つどいの家

「みなさまのお心に感謝！」

社会福祉法人円 まどか 施設長 遠藤 邦弘

東日本大震災から6年4ヶ月が経過した今、元気な笑い声が館内を響きわたっています。被災した当時は、仙台市若林区荒浜にあり施設名も「まどか荒波」としていました。荒浜海岸より1.2kmでうどん、そば、喫茶コーナー、和菓子制作販売等の知的障害者就労支援事業所として順調に手掛けておりました。突然の震災で築7年の施設は一変しましたが、全国から暖かい支援の手が差し伸べられて再建を果たすことができたことに深く感謝申し上げます。

現在は、仙台市太白区袋原でベーカリーカフェを中心に定数70名で運営しております。震災当時の利用者の方は避難訓練をするたびに思い出し震災当時の悲惨な状況を感じ取る方もおりましたが、殆どの利用者の方は元気に前向きに明るく取り組んでおります。

これも被災当時、施設がなくなり呆然としていた私たちに、障害者就労支援事業所「仙台ワークキャンパス」さんのご好意で1年間の間借りができたことでした。また、当時の作業の主力であった喫茶コーナーはできませんでしたので、クラフト製品を作ることで工賃を稼ぐ日々でした。

デザイン担当の職員といろいろと話し合った結果、機械や設備がない中でできることは手作りのクラフト商品を開発しようと復興ブームにあやかり、福を与える縁起物として「福幸だるま」を作りだしましたところ、新聞・テレビで話題となり、全国・北海道から沖縄まで100ヶ所以上からの思わぬ販売のご支援をいただけたことで、働く意欲が沸き、職員も利用者も懸命に働くことができました。これは情報のネットワークが大きな効果を發揮してくれたものと思います。情報の発信力によって、再建の速度に後押しをしてくれました。

今でも施設のキャッチフレーズを「弾ける笑顔！ 交流と学びの館」として「羽ばたけまどかの歌」として歌い続けております。ホームページでは楽譜とBGMも掲載しておりますので是非お聞きください。

最後に、全国の皆さん「まどかにお出で下さい！」皆様のあたたかいお心に感謝申し上げます。



かつての「まどか荒浜」



現在の「まどか」

社会福祉法人 白石陽光園 就労B型八枚田 利用者、職員一同

未曾有の大地震より明くる日、避難所から事業所に戻った光景は無残な建物の崩落現場でした。でも利用者が命にかかる事や怪我も無かった事だけが何よりも救いでした。法人の中でも大きな被害は八枚田のみで法人内で建替えを検討している矢先に難民を助ける会AARジャパンや福祉協会と言った神が八枚田に降りてきて、復興へと導いていただき、地震前と変わらず地域と利用者が、いや今まで以上につながりが深まり、笑顔で日中活動に励んでいます。感謝に堪えません。ありがとうございました。



被災時



新築された作業棟

「今そして未来へ」

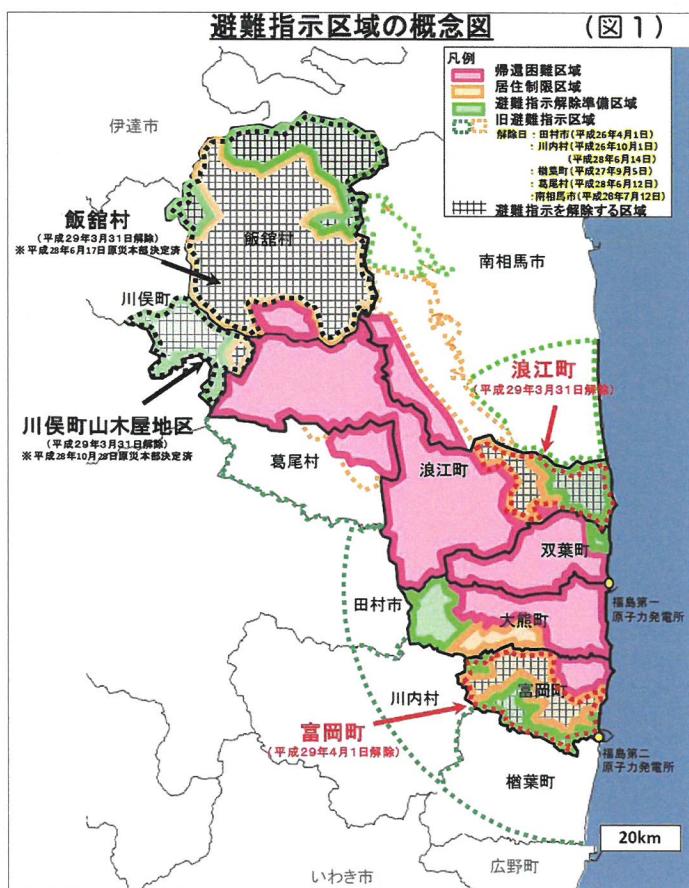
福島県知的障害者福祉協会 会長 古川 敬

ふくしまの「今」

福島県が他の被災地と大きく異なるのは、「東京電力福島第一原子力発電所」を抱えていることであり、この先40年とも50年ともそれ以上とも言われる廃炉完了の時まで福島県民はその脅威を背負い続ける宿命にあることを、表1(*1)が物語っています。原発立地の相双地区に居を構えた当協会加盟二法人の殆どの施設が原発から逃れるために流浪ともいえる避難を経て、千葉県鴨川市、群馬県高崎市で避難生活を送り、現在は県内帰還を果たしたものの、残念ながら図1の状況で故郷に戻ることは叶いませんでした。

支援に感謝し「未来」へ

震災の当初から長きに渡り全国から寄せられた支援物資や義援金は、私たちの大きな励みとなり生きる力となっています。特に義援金は被災した施設の整備などに充てるとともに、毎年開催している県内の知的障害者本人、家族、施設職員が一同に会する研修会の参加費補助に当てることで、県内全ての関係者が恩恵に預かっています。その



東日本大震災における震災関連死者数 (表1) (平成29年3月31日現在)

都道府県	合計	前回との差	年齢別		
			20歳以下	21歳以上 65歳以下	66歳以上
岩手県	463	(3)	1	62	400
宮城県	926	(4)	2	118	806
山形県	2	(0)	0	1	1
福島県	2,147	(61)	1	211	1,935
茨城県	41	(0)	2	6	33
埼玉県	1	(0)	0	1	0
千葉県	4	(0)	0	1	3
東京都	1	(0)	1	0	0
神奈川県	3	(0)	0	1	2
長野県	3	(0)	0	0	3
合計	3,591	(68)	7	401	3,183

ことは、原発の被害者は全ての県民との考えに立ち、福島県の知的障害者福祉の未来創造のために使わせていただくという趣旨に基づいています。

全国の皆様からの物心両面の支援を私たちは決して忘れることなく、これから更に未来に向けて歩みを進めます。

(表1) (図1) 復興庁データ引用
(H29.3.31 現在)

(* 1) 「震災関連死」

地震による建物の倒壊、火災、津波など震災を直接的な原因とする死亡（直接死）ではなく、間接的な原因による死亡のこと。長引く避難所生活で生活で体調を崩したことによる死亡や持病の悪化のほか、病院の機能停止に停止による既往症の悪化、ストレスやP T S D（心的外傷後ストレス障害）による死亡、原発事故により将来に絶望した自殺などが該当する。震災による直接死亡者は宮城県9,541人、岩手県4,673人、福島県1,613人。

福島県福祉事業協会の復興

福島県福祉事業協会 広報事業部

あの時、思いも因らなかった事象による法人施設の過酷な避難生活の中でも「もう限界」と、一時は法人の解散まで頭をよぎって考えておりましたが、多くの方々からの励ましや心温まるご支援により、ここまで復興が出来ましたこと心より感謝申し上げます。残念ながら多くの施設、事業所が以前の場所には戻ることが出来ず、県内3ヶ所での広域的な法人運営となり、大変不便を期しておりますが、復興再建地域の皆様方のご理解により順調に復興が進んでおります。今年度中には移転となる施設・事業所の再建を終わらせる予定です。

それでも震災前の事業形態には戻ることはできません。原発事故後多くの職員が職を離れ、今なお職員不足が大きな壁となっております。当法人に限らず、福島県全体の事案と感じております。それでは現時点での復興施設状況についてご報告致します。

双葉郡川内村に所在していました「あぶくま更生園」は、原発事故後、村内の体育館から田村市の法人事業所、そして4月7日に千葉県鴨川市の一時的に安心して生活できる宿泊施設に移りました。長期間の避難生活の中、同行職員が不足となり全国の福祉協会加盟施設から多くの職員の応援をいただき、厳しい避難生活を乗り切れたこと感謝しております。

当施設は年が変わり2月11日によろしく福島県田村市の応急仮設住宅に大きな不安を感じながら帰還しました。連結型の仮設は施設設備を備えておりません。それでも利用者は福島に戻れた、自分の部屋があると安堵の表情を見せていましたことを今も忘れられません。再出発地からの職員の「使命感」は素晴らしいもので



千葉県立鴨川青年の家への避難



旧 あぶくま更生園



した。限られた人員で日々利用者の健康管理、日常生活を支えてくれておりました。一方では、一日も早い施設再建に向けて多くの課題問題がありました。県・国との協議が進み、平成27年5月に同田村市に入所施設としてはいち早く施設を再建することができました。その後は順次、復興施設を再開しておりますので、今後共、ご支援の程宜しくお願い申し上げます。

私たち3.11を忘れない

社会福祉法人友愛会 法人事務局長
光洋愛成園施設長 寺島 利文

平成23年3月11日に発生した東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い、発電所から10km圏内に位置する福島県双葉郡富岡町にあった当法人は、翌日から利用者66名と職員15名で県内に第一次避難（三春町）。4月15日からは県外に第二次避難（群馬県高崎市）を余儀なくされました。

震災からは6年。5年間に及ぶ大変な避難生活を送り、昨年（平成28年）4月27日、東北に春を告げるまちと言われる同じ郡内の広野町に大小7棟（入所、通所、グループホーム5棟）の事業所を全て新設し、法人一括で帰還することができ、5月1日より事業（利用者68名・職員39名）を再開しました。早い時期に決断したことや一括避難できる規模が幸いしたと思っています。

この間には、全国の多く皆様からたくさんのご支援をいただき、改めて感謝の念で一杯です。

元より当法人は、平成3年の事業所新設以来、入所、通所、地域生活（グループホーム）等の事業所を整備し、この三本柱で利用者の豊かな人生を支援してきました。

現況（利用者77名・職員48名）は、この度の被災をプラス思考し、光洋愛成園（施設入所支援）では、明るく広くした間取りにより快適な日中活動の場となって、今回の避難による「富岡」つながりの縁から世界文化遺産の富岡製糸場（群馬県富岡市）に出荷していた桜染めの再開を進めています。ワークセンターさくら（就労継続支援事業B型）では、看板商品のこ



新たな歴史を一緒に作ろう



敷地内に汚染処理土の山



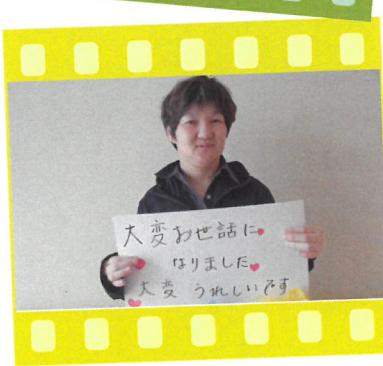
付近の道が封鎖される



んにやくや加工みその製造に大型機械を導入して本格的な再開までになり、利用者はサポートセンターゆうあい（グループホーム5棟）から通所し、順調に回復状態にあります。正に失うものも大きかったけれど、危機管理や人の温かさ等得るものも大きかったと思います。これからも帰還は決してゴールではないことを心して、未曾有や想定外を乗り越えて来た大きな自信と、全国の皆様から注目されていることを大きな励みに、地域の復旧・復興の社会資源としても貢献できるよう、法人の新たな輝かしい歴史を作る覚悟でいます。

※集合写真を裏表紙に掲載

いわてから ありがとう



みやぎから ありがとう



ふくしまから ありがとう



情報把握と情報提供の体制、支援連携の構築に向けて

青森県知的障害者福祉協会 会長 小畠 敦

2011年3月11日夜、施設での夕食の後、テレビに映った光景がいつまでも脳裏から離れない。地震後すぐ停電になったが、当施設では食堂だけは発電機の接続で電気が使える状態であり、テレビから刻々と地震、そして津波の情報が入り、ほとんどの利用者が食堂に集まってテレビを見ていた。そこには目を疑うような光景が映しだされていた。「これは現実か？ この状況だと多くの方が…」と恐怖心とともに我が目を疑った。震災で亡くなられた方々に哀悼の意を表します。

青森県では八戸市を中心として堤防等港湾設備、製紙工場、水産加工場等への大きな被害を受けましたが、幸いなことに福祉関係施設の人的被害や建物への大きな被害はありませんでした。

青森県知的障害者福祉協会では震災後早期に食糧だけでなく薬品の調達をし、避難生活で体調を崩されている利用者や職員のために物的支援を行いました。また、岩手県、福島県の被災施設に対し延べ27人の支援スタッフを派遣し、日中活動の支援・避難施設の衛生管理・食事提供の介助等の支援を行いました。

東日本大震災は広範囲の大規模な震災でしたが、ここ何年かは、地球温暖化による気候変動なのか、各地で予測の困難な豪雨による河川の氾濫や土砂崩れによる多大な被害が出ています。予測が困難というところでは震災に似ているところがあるかもしれません。2～3年前、青森県でもこれ以上の降雨が続くと避難しなければならない状況に直面した施設もありました。そんな時頼りになるのが近隣の法人、事業所ではないかと思います。近いエリアでの事業所同士の情報収集、支援連携を構築することが大切と思いました。

青森県知的障害者福祉協会では災害発生時の速やかな会員施設の情報把握と情報提供のための組織体制がまだ構築されていません。これから、十分な検討が必要に思われます。

東日本大震災の対応

秋田県知的障害者福祉協会 会長 桜田 星宏

2011年3月11日、当日は東北地区知的障害者福祉協会理事会が仙台市のホテルで開催されていた時で、会議中に突然大きな揺れに襲われました。ホテルが倒壊するかと思いましたが、何とか避難することができ、4日後に仙台市から秋田市に戻ることができました。被害の大きさに驚くとともに、被災地支援をどうしたらいいのか迷うばかりでした。

秋田県としては、当時の協会事務局が宮城県協会に被害状況を確認するため、現地に向かい、被害状況の確認をされたとのことです。それを受け、4月の連休から8月にかけ、秋田県内の職員を1週間に一人ずつ派遣をしました。また、2012年の1月から3月まで、1週間に1名ずつの介護職員を福島県の福祉施設に派遣をいたしました。

秋田県知的障害者福祉協会は、今後、大規模災害が起こることを想定し、秋田県内の障がい福祉関係団体で集まり、秋田県障害福祉団体連合会を結成し、大規模災害時の協力体制等についてのマニュアルや支援体制を構築しました。今後とも大規模災害への備えが課題となっていますが、在宅で重度・高齢の障害者への援助など課題も多く、市町村や行政との連携がどうあるべきか、さらなる検討が必要と考えています。

家族状況の把握に3～4日くらい要している。電話不通、避難場所不明等の理由。個人情報の観点から連絡網もなかった。

ガソリン供給がストップし、職員が勤務できない状況も。ガソリン確保に苦労したが、通常利用している所からの提供でしのいだ。

「5m、10mの津波」と聞いても、どの程度の津波か想像できなかった。警報は出していたが、よく聞こえなかった。

職員の自宅が被害に遭った中での震災対応について、その負担感は想像を絶するものがある。

被害状況を法人全体で把握するのにも時間がかかる中で、地域の人たちの支援も合せて行う現状であった。

原発事故直後には正しい情報がないために、放射線の驚異から逃れるための離職者が多数発生した。

原発事故の驚異により、大学等へ進学する若者が福島県外に流失し、卒業後も戻らなくていいと親が送り出していた。

原発事故の驚異のために、運送業者等がいわき市に入ることを拒否し、茨城県までしか食料等が入らなかった。

学校、保育園等で保護者に引き渡した後、犠牲になった子どもがいる。

ボランティア運営まで手が回らない状況があった。震災時のボランティア受け入れの心構えと担当者育成の必要性。

福島県の施設へ就職を希望した他県の大卒業生に対し、原発事故の理由から親が反対した。

就労系の事業所が下請けで作る製品が、福島県内で生産されたという理由で返品された。

不安軽減のためにも、情報発信者は、「今出来ていること、出来ていないこと」正確に伝えることが大切。

想定を超えることが多く、避難行動を取った際に、シミュレーションどおりにできない部分が多くあった。

ものに執着して命を落とす、必ず身一つで逃げなさい。一旦逃げたら、戻らないこと。車で逃げないこと。

外出中の家族の帰りを待っていて、流されて亡くなつた方が多くいる。

震災状況を全体的に把握し、利用者・職員の状況が想像でき、やるべきことがコードィネートできる職員育成と配置が必要。

避難者の移動が頻繁に行われ、生活環境がその都度に変化した。コミュニティの変化がストレスに。

津波は3倍で来る。警報が3mなら実際は9mと思え。津波、とにかく逃げて。

いま、あなたにできること。
「避難を続けること」「備えること」「語り継ぐこと」

震災から6年、地域の復興は進まず、仮設住宅での心労が重なり、自殺者が多く見られるようになっている現状。

100回逃げて、100回津波が来なくても、揺れたら101回目も必ず逃げること。

複合災害（地震、津波、原発事故、風評被害）の発生。繰り返された避難、そして県外へ。

要配慮者、女性、子どもに対し、配慮した避難所運営の想定し、避難者による避難所運営の訓練も必要。

この報告書をお手に取っていただき、ありがとうございます。

新たにお知りになったことが多かったのではないかでしょうか。東北に住む私たちでさえも現地に赴いて初めて当時の状況や現状を知るということがまだまだあるのです。

東京オリンピック開催が決定し、関連施設の建設に係る人的不足と資材高騰が報じられました。しかし、被災地では同様に先ずは資材高騰、そして工事関係者のひと不足が復興工事進捗の足かせとなりました。復興の旗印としてオリンピック開催の決定に、被災地住民から「何がオリンピックだって、どっちが大事なんだ」との切実な声が発せられました。

当時のことを少し思い起こしてみます。長時間の停電により、発災直後の被災状況が正確につかむことが出来ませんでした。ラジオや新聞がそれぞれの特性を生かした情報を提供し続け、SNS情報から人命救助につながったという好事例がありました。「家族や知人が無事であってほしい」、「一人でも多くの方が助かってほしい…」、様々な願いが交錯する中、被災地上空を飛行する報道ヘリの音が搜索の妨げになるとの理由で飛行制限がかかりました。

災害時に限らず、報道の在り方が問われることがあります。有効と評価されるSNSでも活用のなされ方によって、デマや誹謗中傷記事の流出について問題視されることがあります。総じて「想像の欠如」を強く感じることが震災時にも発生しました。情報の受け手の身になって、少しの想像の働きかせ方で容易に防げたのではないかと至極残念に感じています。

前頁の証言集にはごく一部ですが、当時起きたこと、その後に生じた事柄を記しています。一つひとつをご自身に当てはめてみてください。食事が燃料が確保されなかった場合にどう行動するのか、災害に遭った場合に家族の安否を確認するルールをどう取り決めるのか、…。

あの日から7年。震災遺構として保存か取り壊しかの議論が未だに続いている自治体があること。福島からの報告で触れられている震災関連死を防ごうとの対策が取り続けられていること。行政側のひと不足も深刻であり、全国の自治体から応援職員を引き続き求め続けていること。心理的負担がのしかかったのでしょうか、その応援職員の自死という悲しい事実もあること。

福島県のおかれた状況は複合災害（地震、津波、原発事故、風評被害）であると証言集で触れられています。被災地からの転居・転校という理由でいじめに遭うという悲しい事実が起きました。いわれなき多くの差別・偏見が生まれましたことに対しても「想像の欠如」を感じました。復興以前に未だに復旧活動の途上にあるという福島県の事実。東北被災県のまちの復興、人の復興はまだまだ途上であることを是非知っていただきたいのです。

卓球日本代表チームのユニホームには震災以降も「W A S U R E N A I 3・1・1」と記されています。「がんばろう東北」とステッカーが貼られた車両が今でも全国各地を走り廻っています。全国の皆さまが「私たちが出来ることを続ける、そして忘れない」との意識を持ち続けていること、応援し続けて下さっていることを私たちは知っています。被災地では以前から風化懸念が起きていますが、被災経験のある東北だからこそ発信し続ける使命と責任があるとの自覚を持ち、災害対応の在り方や備えるべき教訓を含めた現状報告を今後も全国に発信してまいります。

失ったものは二度と元に戻ることはありません。しかし、私たちは全国の皆さまからのご支援をいただき、その想いやお励ましに触れ、多くの心の財を得ることができました。全国の皆さんにあらためて感謝を申し上げ、本報告書の結びとさせていただきます。





福島県 友愛会・光洋愛成園のみなさん

東北はひとつ

平成30年3月11日発行

発 行 東北地区知的障害者福祉協会
山形県山形市美畠町4-31（社会福祉法人愛泉会）

印 刷 指定障害者支援施設 岩手ワークショップ
岩手県盛岡市緑が丘二丁目 4番60号